メインバンクをめぐる新しい問題：「メイン寄せ」の理論的分析*

小佐野広[†] **・小林磨美**[‡] **・寺崎真美子**[§] **・中村友哉**[¶]

２００９年３月６日

概要

メインバンクからメインバンクでない他の銀行（非メインバンク）が資金を引き揚げた場合に、さらに貸出先企業への投資を継続するためには、資本市場から追加的な資金をメインバンクが調達する（いわゆる「メイン寄せ」）必要がでてくる。本稿は、この「メイン寄せ」に伴う諸問題を理論的に考察している。非メインバンクの投資量に対して企業の潜在的なキャッシュフロー（もしくは清算価値）が減少（もしくは増加）する場合、または、貸出先企業が成功する可能性が低下する場合は、メインバンクに対する脅しとして非メインバンクの資金引き揚げが機能することで、不良債権に対するメインバンクの効率的な対応を促してゾンビ企業問題を防ぎやすくなるだけでなく、メインバンクが情報収集の役割を積極的に引き受けやすくなることを示す。そして、1990 年代末以降に生じた日本におけるメインバンク関係の刷新に関する効率性の面における評価と刷新されたメインバンクシステムに対する実証的な含意に対して、理論的な結果を提示する。

JEL Classification: D82, D86, G21, G23, G24, G33.
キーワード: 流動性, メインバンク, ゾンビ企業.

*本論文は、日本銀行からの委託研究に基づいている。本論文の以前のバージョンにおいて、安藤至大、内田浩史、菊谷達也、副島豊、藤木裕の各氏、および、日本銀行・ Contract Theory Workshop・ Monetary Economic Workshop (Osaka University)・独立法人経済産業研究所 (RIETI) 等の各研究会の参加者の方から、有益なコメントを受けた。ここに記して感謝したい。なお、この論文は、あくまで筆者たちの見解を表すものであり、日本銀行の見解を表わすものではない。

[†]京都大学経済研究所
[‡]近畿大学経済学部
[§]京都大学大学院経済学研究科博士後期課程
[¶]京都大学大学院経済学研究科博士後期課程